

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名

稲垣 善律

本論文は、日本人英語学習者の動機づけ過程をモデル化することを目的とし、同過程において学習動機と学習成果とを結ぶ要因としての学習行動、さらに学習動機と学習行動とを仲介する要因としての習得目標にそれぞれ着目しながら、これら4つの要因—学習動機、習得目標、学習行動、学習成果—の因果関係を明らかにすることを試みている。論文は、研究全体の理論的枠組みを論じた第1章、予備調査を通じてデータ収集法の妥当性・信頼性を検討した第2章、本調査の実施方法、および結果の詳述とその考察を行った第3～5章、研究の教育的示唆と今後の課題を論じた第6～7章から成っている。

本論文の評価すべき点は、大きく分けて三つ挙げることができる。第一の点は、その理論的枠組みの独自性である。本論文は、これまでの研究において必ずしも明確に区別されてこなかった「動機」と「動機づけ」との関係を最初に明示し、その上で、「動機」が「成果」につながるまでの過程に介在しうる数多くの変数の中から「習得目標」と「学習行動」に着目する必要性を詳細に論じている。この分野におけるこれまでの研究の多くが「動機」によって「動機づけ」そのもの、あるいはその結果としての「成果」を説明しようとしてきたことを鑑みれば、動機づけ過程の構成要素をそれぞれ明確に概念化し、これらによって動機づけの全体像を包括的に捉えようとする本論文の視点は、他の動機づけ研究と一線を画すものであると言える。

第二の点は、調査結果の信頼性である。本論文においては、調査で用いるすべてのデータ収集手段について、約2年間、7つの予備調査を通じてその妥当性と信頼性の検証を行っている。また、本調査の際には、入念に計画されたデータ収集を548名の被験者を対象として約10ヶ月間にわたって実施し、収集したデータについてはその信頼性を十分に検討したうえで分析を行っている。さらに、分析の中核を担う変数間の因果関係に関する検討には、誤差が比較的小さいとされる構造方程式モデルを用いた共分散構造分析を行っている。こうしたすべての取り組みや工夫は、本論文における調査データ、さらにその分析結果の信頼性を高めることに貢献しており、結果的に本論文が提示する7つの動機づけモデルの信憑性をも高めている。

第三の点としては、本論文が構築したモデルの意義が挙げられる。これまでの動機づけ研究では、動機づけ過程の始点としての動機と、結果としての成果を直線的に論じるものが多く、それゆえこれら両者を結ぶ過程で何が起きているのかがほとんど明らかにされてこなかった。しかし、本研

究では、学習動機、習得目標、学習行動、学習成果のどの側面の間どの向きの因果の流れがあり、それがどの程度の強さのものなのかを明確にモデル化したことで、これまで空白だった動機と成果とをつなぐ動機づけ過程の基本的構造を目に見える形で検証している。このことにより、これまでの研究では理論的想定の下で論じられてきた動機と成果との因果関係そのものが実証されただけでなく、これまでの研究では十分に説明することができなかった問題、例えば「なぜ動機の種類によって成果が異なりうるのか」といった点が習得目標、あるいは学習行動の観点から説明可能になったことは、本論文の大きな功績であると言える。したがって、本論文で提示されたモデルは今後の動機づけ研究の土台と成り得るものであるが、こうしたモデルのもう一つの強みは、これらが今日までの動機づけ研究の主流だった「統合的・道具的動機づけ」の枠組みではなく、自己決定理論に基づく「内発的・外発的動機づけ」の枠組みを用いていることである。自己決定理論に基づく枠組みが伝統的な「統合的・道具的」枠組みよりも幅広い学習動機を包含し、なおかつ各動機の種類の相互関係が明確であるという長所を考慮すれば、本論文のモデルは今後の動機づけ研究の発展に大きく寄与する可能性を秘めていると言える。

一方、本論文の課題としては、モデルの説明力に関する以下の点が挙げられる。まず、本論文における動機づけモデルは「学習動機が習得目標と学習行動を通じて学習成果に影響を与える」という因果の流れを示すものであるが、動機づけとは動的な過程であり、ある「動機」によってもたらされた「成果」が、新たな「動機」へとつながることは十分に有り得るものと考えられる。したがって、今後は学習成果から学習動機への因果の流れについても検証した上で、動機づけのこの「動的特性」を今回得られたモデルがどのように説明しうるのかを検討していく必要がある。同様に、本論文のモデルにおいては、動機づけ過程に関わる要因として学習動機、習得目標、学習行動の3要因のみに着目しているが、実際の学習場面においては、学習者の動機づけには自信や不安といった情意要因、あるいは期待や価値といった認知要因も大きく関わっているはずである。例えば、学習者の不安の高まりが学習行動を抑制する、あるいは学習者の言語習得に対する期待の高まりが積極的な学習行動を生む、といったことは十分起こり得よう。今後は、本論文で得られたこれら7つのモデルに学習動機、習得目標、学習行動以外の様々な要因を段階的に組み入れていくことで、外国語学習者の動機づけに関するさらに説明力のあるモデルの構築へとつながっていくことが期待されよう。

以上の審査結果に基づき、本審査委員会は、本論文が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。